繪畫は五十四葉の中(32)の大曆六年の佛畫は年月を附せられた點に於て特に目立つて見え、其の他唐代の繪畫と說明せられてある(24)(25)(43)の佛畫の斷片、(46)の水墨で樹木を書いたもの、(51)の樹下美人圖、(52)の婦女圖斷片等は繪として極めて注意すべきものと思ふ、壁畫は六朝時代から唐、唐宋間の三朝に區別されてあるが、六朝のものは(2)一葉丈けでこれには主として顏面の描かれてある斷片八個を集め、唐代のものは十葉に及んで居るが(1)(3)(6)等の著しく西域の風を示して居る繪が際立つて見える。唐宋間のものは銘丈を合せて十二葉其の畫面も立派な大きな斷片であつて、時代こそ前者に比して後れるが、畫としての面白味は寧ろ此等に於て認められる樣に思ふ。

彫刻は十五葉、時代は唐のものばかりで、銅製陶製のものから石造、塑造、木造のものに及び、其の形も佛像、人像から鳥獸の諸像等多くの種類を含むで居るが、此の中では(5)(6)(10)の人頭塑像(11)(12)の塑造人像などを擧げねばなるまい。

染織刺繡は唐代のものばかり七葉でみな小さな斷片であるが、就中(4)の刺繡の斷片に天女が琵琶を彈いて居るのなどは我が奈良朝時代の繡佛に見えて居るものなどゝ思ひ合されて面白い。

古錢は八葉で支那の貨幣は五銖錢を初めとして唐宋時代のものに亙つて居るが(3)の中には「高昌吉利」なる方孔錢が一枚見えて居つて此の地で鑄造せられ通用せられたものであるのを知ることが出來るのは甚だ注意すべきものである。漢字以外の文字の銘ある貨幣にはカロスチー文字かと思はるゝものもあり、梵字のものもあるが、多くはアラビア文字のもので比較的新時代のものゝ多いことを示して居る。

雜品の部は十葉で名の如く布製、土製木製石製或は銅製等の雜品が收められてあるが(1)の中の土製の香爐、(2)の